

E-2

間接疑問縮約は in-situ focus から派生する

松本 大貴

京都大学大学院博士後期課程/日本学術振興会特別研究員(DC1)

Mail: matsumoto.daiki.24x@st.kyoto-u.ac.jp

要旨 本発表では、日本語における Sluicing は分裂文から話題要素を省略した結果得られるという、Sluicing の分裂文分析を批判的に検討する。その上で、代替案として、Sluicing は in-situ の「のだ」文から *wh* 要素を文頭に移動させたのちに残部を PF で省略することで得られるという、Sluicing の in-situ focus 分析を提案する。さらに、PF における省略は、*wh* 要素が引き起こす後焦点縮約 (Post-focal reduction) が大規模に起こった帰結であると主張する。加えて、本提案の全体を支える骨組みとして、Norvin Richards が提案する隣接理論 (Contiguity Theory) を採用し、Sluicing という現象に対して統語と音韻のインターフェイスの観点から原理的説明を試みる。最後に、日本語における Sluicing 以外の省略現象についても、隣接理論の観点から統一的な説明を与えられる可能性について、簡単に概観する。

1. 導入

日本語には、(1)に見られるような Sluicing 現象が存在する (Δ は省略箇所を表す)。

(1) 直也が麻里に何かをあげたらしいが、僕は[何(を)Δ(だ)か]知らない。

本発表では、Δ で示される省略がどのような派生から生じるのかを考察する。特に、Hiraiwa and Ishihara (2012) (以下 HI) による、Sluicing の分裂文分析を批判的に検討し、**Sluicing は in-situ focus から派生すると論じる**。

2. HI による Sluicing の分裂文分析とその問題点

2.1. HI による Sluicing の分裂文分析

HI は、Rizzi (1997) などによるカートグラフィの枠組みを採用し、日本語の in-situ focus (あるいは、「のだ」文) に対して、(2)のような基底構造を与えている。

(2) [_{ForceP} [_{TopP} [_{FocP} [_{FinP} 直也が麻里に Meshuggah の CD をあげた]の _{Fin}]だ _{Foc}] Top] Force]

加えて、HI によると、(2)の基底構造から、(3)の分裂文が派生する。

(3) [_{ForceP} [_{TopP} [_{FinP} 直也が麻里に _{t_j} あげたの _{Fin}]は _{Top}]_i [_{FocP} _{t_i} [Meshuggah の CD]_j] だ _{Foc}] Force]

構造(3)は、以下の手順で派生する: まず、焦点要素である「Meshuggah の CD」が Foc 指定部へ移動する。その後、FinP の残部要素である「直也が麻里に _{t_j} あげたの」が Top 指定部へと移動する。

HI は、このような分裂文派生のモデルをもとに、(1)のような **Sluicing は分裂文から派生する**という興味深い提案をしている。この **Sluicing の分裂文分析**によると、(1)の Sluicing は、以下のように生じる。

(4) ...僕は_{[TopP} ~~直也が麻里にもあげたのは~~_] _{[ForceP} _{[FocP} ti 何を;だ]か_]知らない。

Wh 要素である「何を」が *Foc* 指定部に移動したのち、*Top* 指定部に移動し、この話題要素が省略を受ける。つまり、分裂文分析のもとでは、*Sluicing* は *Top* 指定部に移動した話題要素の省略に他ならない。

HI は、*Sluicing* を *in-situ focus* から導出する以前の分析 (Hiraiwa and Ishihara 2002) と比較して、このような分裂文分析を支持する経験的なデータをいくつか挙げている。まず、*Sluicing* は焦点要素がとりたて詞「さえ/すら」を担えない (HI: p. 169)。

(5) *直也はだれか意外な人に電話したらしいけど、僕は誰にさえ/すら(だ)か知らない。

(6a)が示すように、分裂文も同様のふるまいをするが、(6b)の *in-situ focus* の「のだ」文は焦点要素がこれらのとりたて詞を担うことを許容する (HI: *ibid*)。

(6) a. *直也が電話したのは麻里にさえ/すらだ。

b. 直也が麻里にさえ/すら電話したのだ。

このように、*Sluicing* が *in-situ focus* ではなく分裂文と同様のふるまいを見せることから、HI は分裂文分析が支持されると主張する。

また、HI は Watanabe (2004)の観察に基づき、さらに分裂文分析を補強する。Watanabe は、(7)に観察されるように、「も」を含む否定極性表現が、否定要素を顕在的に用いずとも否定的返答として機能することを示している。

(7) 直也は誰かに Dirty Loops の CD をあげたの?—いや、誰にも Δ。

HI が指摘するように、*in-situ focus* はこのような「孤立した NPI」を認可するが、分裂文はそれを認可しない。

(8) a. 直也は誰にも Dirty Loops の CD をあげなかったのだ。

b. *[直也が Dirty Loops の CD をあげなかったの]は誰にもだ。

興味深いことに、この場合においても、*Sluicing* は分裂文のようにふるまい、孤立した NPI を認可しない (HI: p. 171)。

(9) 直也は結局予定していた何人かに CD をあげなかったらしいけど、

a. *僕は誰にもだと思う。

b. *僕は誰にもだか知らない。

HI はこのような事実から、分裂文分析が支持されると結論づけている。

2.2. Sluicing の分裂文分析の問題点

このように、一見経験的な事実から支持されるように思われる分裂文分析にも、いくつかの概念的および経験的問題がある。まず、HI 自身が指摘するように、分裂文分析では、(10)のような **matrix sluicing** と呼ばれる例が説明できず、結局 **in-situ focus** から導出される **Sluicing** の存在を想定せざるを得ない。というのは、(11)に示すように、ガ格を焦点として分裂文で標示するような構造は容認されないからである。

(10) 研究室の誰かが Peter Gabriel の『Us』を買ったんだよ—誰が Δ (ですか) ?

(11) Peter Gabriel の『Us』を買ったのは、うちの研究室の M1(*が)だ。

よって、分裂文分析には理論上の余剰性があることは否めない。

また、(6)のとりたて詞が分裂文において認可されない理由は、分裂文の持つ「総記焦点」(**exhaustive focus**)という特徴と、これらのとりたて詞との間の意味的不整合性にあると考えられる。その証拠に、(12)に示したように、とりたて詞を「だけ」に変えた場合、分裂文は認可される。対して、(13)を見るとわかるように、文脈を整えた上で(5)のとりたて詞を「だけ」に変えてもなお、Sluicing は認可されない。

(12) 直也が電話したのは麻里にだけだ。

(13) *[?]直也は誰か一人に電話したらしいけど、僕は誰にだけか知らない。

よって、分裂文分析を支持するとされていた経験的データには不備があることがわかった。以上の問題点を踏まえて、次節では、**Sluicing は in-situ focus から派生する**と提案する。

3. 提案: Sluicing は in-situ focus から派生する

3.1. PFR と省略

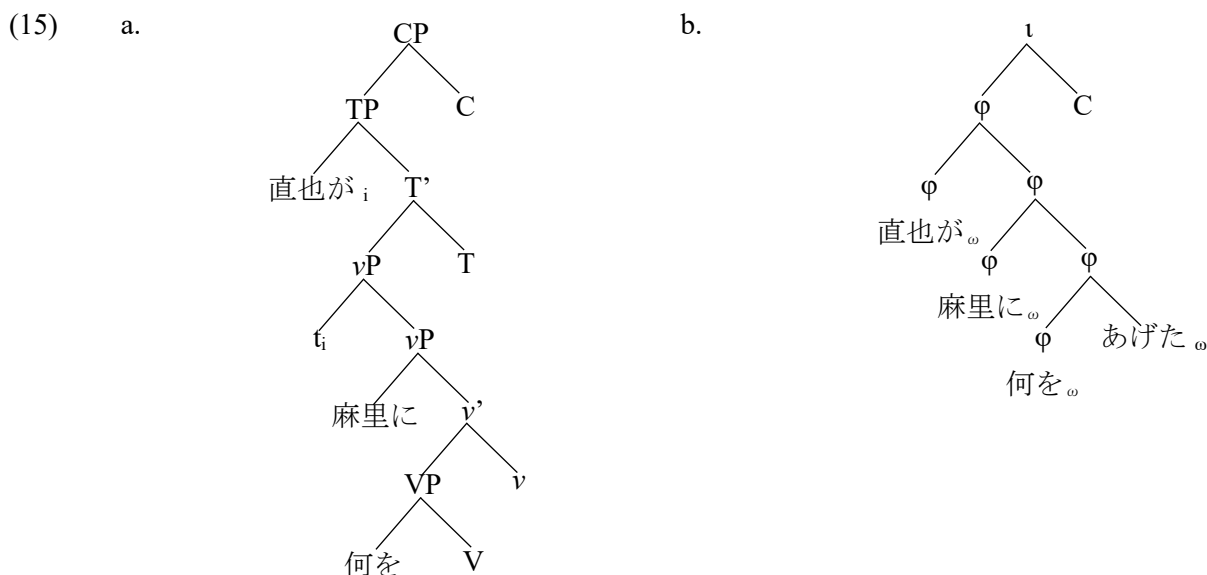
以上の問題点を踏まえて、本発表では、Hiraiwa and Ishihara (2002)のように、**Sluicing は in-situ focus** を基底構造に持ち、wh 要素が ForceP/CP 指定部に移動して、残部を PF で削除することで生じると主張する。加えて、PF 削除は、焦点要素や wh 要素に後続する要素のピッチが圧縮される後焦点縮約 (Post-focal reduction: PFR) (Ishihara 3003; Sugahara 2003) が強く起こった結果であると論じる。Ishihara (2003)が示すように、wh 要素は (少なくとも東京方言では) ピッチが上昇し、後続する要素のピッチを下げる。したがって、本提案のもとでは、(1)の **Sluicing** は以下のように派生する (PFR を引き起こす焦点/wh 要素を太字で、そして PFR を受ける要素をサブスクリプトで表す)。

(14) 僕は_i[ForceP **何を** _i [Force' [FocP [FinP 直也が麻里に _i あげたの] _i] _i] _i] _i] 知らない。

しかし、このままではなぜ PFR を受ける「か」(および「だ」) が省略されないのかが説明できない。この問題点を解決するために、次小節で Richards (2016) の隣接理論を導入する。

3.2. Contiguity Theory と省略

Richards (2016) の隣接理論では、Selkirk (2009, 2011) の適合理論 (Match Theory) に基づき、統語構造における X^0 , XP, Clause がそれぞれ ω , ϕ , ι に対応すると考えられている。そのため、(15a) の日本語の統語構造は、統語と音韻のインターフェイスで(15b) の韻律構造に変換される。

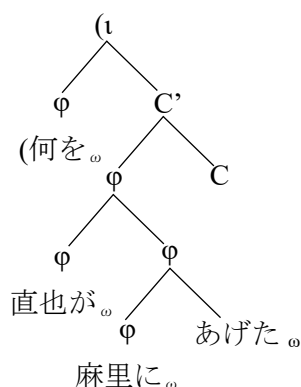


さらに Richards は、Probe-Goal 関係 (を含む統語関係一般) を構築する際に、韻律構造において (16) および (17) に示したような条件が満足されなければならないと提案している。

- (16) ある主要部 H と (一致や選択などの) 関係を結ぶ句 XP は、一つの韻律句のみに支配されねばならず、XP はその韻律句の中で隣接的に卓越 (Contiguity-prominent) していなければならない。
- (17) α が活性化韻律句 (prosodically active phrase) の端に隣接 (adjacent) する時、 α は隣接的に卓越している。

特に(17)における「活性化韻律句の端」について、Selkirk and Tateishi (1988, 1991) に基づき、日本語は ϕ および ι の左端を活性化すると考えられている。そのため、(15b) の *wh* 要素「何を」は、左端を活性化しており、C とそれ自身を支配する ι の左端に隣接していなければならない。しかし、(15b) に示すように、 ι の左端と「何を」との間には、 ϕ 「直也が」と ϕ 「麻里に」が介在しており、(17) が満たされていない。このように隣接条件が満たされない韻律構造を修復する手段として、*wh* 移動を講じることができる。その結果、(18) に示すように、*wh* 要素の左端と ι の左端が隣接し、(16, 17) が満たされ、*wh* 要素の Probe-Goal 関係が認可される (活性化された端を“(”で表示する)。

(18)



Branan (2018)は以上の隣接理論を拡張し、PFR のような韻律的現象の範囲は、(16)における Probe と Goal を支配する唯一の韻律句によって定められるとする スパニング (Spanning) を提案する。この考えに基づくと、wh 要素によって引き起こされる PFR のスパン (範囲) は、(18)の t に定められる。

以上、Richards (2016)の隣接理論と、Branan によるスパニングを採用し、(14)において C 主要部「か」が省略されない理由は 当該の主要部が隣接範囲すなわちスパンを指定する主要部だからであると提案する。この提案は、(19)のように定式化できる。

(19) スパンを指定する Probe 主要部は、それ自身が構築する文法関係によって引き起こされる PFR によって省略され得ない。

この(19)に従うと、(14)における「か」の省略不可能性が説明される。(18)の構造からもわかるように、「か」は wh 要素「何を」と隣接範囲すなわちスパンを形成するため、PFR による省略を受けないのである。

また、本分析のもとでは、(10)=(20)のような例も統一的に説明できる。

(20) 研究室の誰かが Peter Gabriel の『Us』を買ったんだよ—誰が Δ?

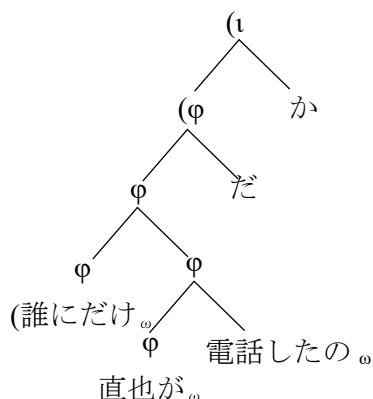
このような例では、疑問の C/Force 主要部が元々音形を持たないと考えれば、「誰が」による PFR によって Δ が導かれると論じられる。

また、(13)=(21)が容認されないという観察に対しても、本分析では統一的な説明を与えられる。

(21) *??直也は誰か一人に電話したらしいけど、僕は誰にだけか知らない。

とりたてて詞「だけ」は、総記焦点を標示する要素である。また、in-situ focus の「だ」は、HI が想定するように焦点をマークする。これらを勘案し、本発表では、「だけ」を担う要素は、自身と主要部「だ」を支配する韻律句の中で(16)を満たさねばならないと提案する。よって、(21)の下線部は以下の構造を持ち、「だ」は(19)によって省略されてはならない。

(22)



その証拠に、(21)の「だ」を残留させた(23)は、(21)と比べてはるかに容認度が高い。

(23) ⁽⁹⁾直也は誰か一人に電話したらしいけど、僕は誰にだけだか知らない。

よって、本提案は分裂文分析では説明できない事象を簡潔に説明できることがわかる。

同様の説明が、(9)=(24)にも与えられる。つまり、

(24) 直也は結局予定していた何人かに CD をあげなかったらしいけど、

- a. *僕は誰にもだと思う。
- b. *僕は誰にもだか知らない。

「誰にも」は否定極性表現であり、したがって否定辞の主要部 Neg (ない/なかった) との間で(16)の関係を構築しなければならない。よって、Neg 主要部の省略は許されない。なお、(8b)の分裂文が許されないのは、分裂文の総記焦点と「誰にもあげなかった」という否定表現との間の意味的不整合に起因すると考えられる。

付随して、(7)にある「いや、誰にも Δ」に見られるような Neg 主要部も含む省略が許されるのは、先行する「いや」によって否定が認可されているためだと考える。この想定は、(25)に見るように「いや」を省略した場合に Neg 主要部を含む PFR による省略が認可されないことから支持される。

(25) 直也は誰かに Dirty Loops の CD をあげたの?—*誰にも Δ。

以上から、Sluicing の分裂文分析で説明されていた現象の全てを、本提案のもとでも説明しうることが確認された。加えて、分裂文分析にとって問題となる現象の数々も、本分析では統一的に説明されることを見た。よって、概念的かつ経験的観点から、隣接理論に立脚した Sluicing の in-situ focus 分析が支持される。

4. 結論と展望

本発表では、Sluicing の分裂文分析を批判的に検討し、隣接理論の観点から、Sluicing は in-situ focus

から派生すると提案した。特に、スパンを標示する主要部は隣接範囲を規定しなければいけないため PFR による省略を受けないという提案により、統語と音韻のインターフェイスの観点から、Sluicing という現象を捉えることが可能になった。また、本分析では、削除のメカニズムについて、PFR という独立に観察されている音韻現象のみに依存しているため、概念的にも優れていると考えられる。

最後に、本提案が持つ1つの帰結について考える。省略/削除が隣接範囲内での PFR で生じるのであれば、いわゆる項省略 (Argument Ellipsis) など、その他の省略現象についても同様の説明が与えられると考えるのが自然であろう。事実、項省略の例はどれも省略を受けない要素が何らかの形で (対比) 焦点を担っているものであるため、焦点要素の隣接条件がある主要部との間で満足されねばならず、それらの要素を支配する韻律句がスパンとなり、その範囲で PFR が起こると考えることができる。すると、(26)のような項省略の例も、隣接理論の観点から説明できる。

(26) 太郎は自分の父親を愛していて、花子も△愛している。

項省略を含むその他の省略についての具体的な分析は、今後の研究課題とする。

参考文献

- Branan, Kenyon Garrett. 2018. *Relationship preservation*. PhD dissertation, MIT.
- Hiraiwa, Ken, and Shinichiro Ishihara. 2002. Missing links: Cleft, Sluicing, and "no da" construction in Japanese. In *Proceedings of the 2nd HUMIT Student Conference in Language Research (MIT Working Papers in Linguistics 43)*, eds. Tania Ionin, Heejeong Ko and Andrew Nevins, 33–54.
- Hiraiwa, Ken, and Shinichiro Ishihara. 2012. Syntactic metamorphosis: Clefts, sluicing, and in-situ focus in Japanese. *Syntax* 15. 142–180.
- Ishihara, Shinichiro. 2003. *Intonation and interface conditions*. PhD dissertation, MIT.
- Richards, Norvin. 2016. *Contiguity theory*. Cambridge, MA: MIT Press.
- Selkirk, Elisabeth. 2009. On clause and intonational phrase in Japanese: The syntactic grounding of prosodic constituent structure. *Gengo Kenkyu* 136: 35–74.
- Selkirk, Elisabeth. 2011. The syntax-phonology interface. In *The handbook of phonological theory 2nd edn*, eds. John Goldsmith, Jason Riggle, and Alan Yu, 435–484. Oxford: Blackwell.
- Selkirk, Elisabeth, and Koichi Tateishi. 1988. Constraints on minor phrase formation in Japanese. In *Chicago Linguistic Society (CLS) 24*, eds. Lynn MacLeod, Gary Larson, and Diane Brentari, Vol. 24, Part One: The General Session, 316–336. Chicago: Chicago Linguistic Society.
- Selkirk, Elisabeth, and Koichi Tateishi. 1991. Syntax and downstep in Japanese. In *Interdisciplinary approaches to language: Essays in honor of S.-Y. Kuroda*, eds. Carol Georgopoulos and Roberta Ishihara, 519–543. Dordrecht: Kluwer Academic.
- Sugahara, Mariko. 2003. *Downtrends and post-FOCUS intonation in Japanese*. PhD dissertation, University of Massachusetts, Amherst.
- Watanabe, Akira. 2004. The genesis of negative concord: Syntax and morphology of negative doubling. *Linguistic Inquiry* 35: 559–612.